

序文

この本はフィクションではない。残念ながら、現在起こっている事実についての正確な記述なのだ——子宮頸がんにかかわるウイルスに対して有望視されていたワクチンが一転、若年の男女にきわめて深刻な副作用を惹き起こし、死亡例までも現れるという事実。

WHO（世界保健機関）、FDA（米国食品医薬品局）、CDC（米国疾病管理予防センター）、EMA（欧州医薬品庁）といった公的機関は、いまだにこのワクチンを支持しており、ワクチン製造企業の宣伝やロビー活動によって、一部の国々では接種勧奨が続いていて、米国では接種が義務づけられている州さえある。

この本の読者は以下のまうな真実を知ることだろう。医療専門家が届け出る副作用は過少報告される一方、愛する子どもが生涯にわたるハンディキャップを負わされ、生命までも奪われてしまった親たちが製薬会社や政府を相手に起こす訴訟件数は増大している。

実際、これは私たちの社会のさまざまな場所で、若い世代の健康と保護よりも経済的利益が優先されてきた結果、世界中で起きている悲劇の実例なのである。

このスキャンダルを世界に示した著者たちに祝意を表したい。

HPV ワクチンが何千という世界中の若者に傷害を負わせていることは罪である。

ワクチンは、歴史的には多くの人々を守ってきたのだが、現在では、過去何年かを振り返ってみても、HPV ワクチンやその他あまりにも多くのワクチンが多くの人々に害を与え、かついのちを奪ってきた。すべてのワクチンは、誰にとっても安全でなければならないし、またそれは実現可能なことなのである。

私たちの将来は医療倫理の尊重にかかっていることをヒポクラテスのこの誓いは教える。「何よりもまず、害を与えてはならない」

リュック・モンタニエ 医師（HIV の発見によるノーベル賞受賞者）